

「総・要」表現の研究ノート（二）

——開かれた平易な表現を目指して——

芹澤泰謙

一、はじめに

人間の思考を整理する方法論として、概念の規定と推論の形態を論考する論理の面から、日蓮教学の整理を「総合の表現」という言い方で、考察を試みたい。推論の形として「総合と分析」の「総合」は演繹的であり、日蓮聖人（以下聖人と略称）が示した『法華経』の他経（更には他思想まで拡大）に対する優越性・超越性は題目の五字が「総名」として示される総合性ということで、その教判は『観心本尊抄』の「五重三段」に比定される。「分析」は帰納的であり、『法華経』の統一性・純性を他経との対比で示すことであり、『開目抄』の「五重相對」がそれに比定できる。伝統的な宗学の立場からすると、乱暴な比定と指摘されようが、『法華経』の優越性と唯一性を総合と分析の両面から、推論方法の形でみるならば妥当性はあるといえる。五重三段による題目は総名、五重相對による題目は「広略要」の「要」であることは先師の指南するところであり、「総名」は『報恩抄』『四信五品鈔』『妙法尼御前御返事』等に示され、「要」は『法華題目鈔』『法華取要抄』『曾谷入道殿許御書』等に見ることができ。そして日隆聖人（以下隆師と略称）は『法華宗本門弘経抄』のなかで題目の五字を「総要」と表現されて

いる。

そこで、本論文の考察のテーマは、教学用語としての、総や要という概念を漢語としての論考から、現在使用されている日常の日本語―日常会話のレベルを念頭―で、「総じて」とか「要するに」等と言うと、この言い方は漢語から和語（日本語）的日常語、漢語の単語が多くの場合、名詞としての使用から、和語が形容詞や副詞として用いられることになり、漢語の意味や概念を保持しながらの言い換えはどういうものであろうかと考えたいのである。そこで問題なのは、今日現在の私どもの使用している日常語としての日本語は、和語・漢語・カタカナ語、そしてカタカナ表記であっても意味は訳されない直接使用される外国の言語が混在していることである。現代日常語の問題は、多くの識者が、日本語の乱れ、ということとで警鐘を鳴らしているが、現実を否定的に捉えるのではなく、現実を受け入れてどうすべきか、とする立場をとりながら、このことを考えていきたい。

そこで確認しておくことは、言語の使用は人間相互の意志の伝達・交換であり、コミュニケーションと言われるものであって、会話と文字（活字）がその主流であることは大前提として受容しておくことである。また、人間の思索はその人の用いる言語（使用することば）をもってなされることもアプリオリに前提となっている。そのことを踏まえた上で、教学用語の専門語化に注意をしながら、平易な表現をどう目指したらよいか、が筆者の関心なのである。日常の日本語がどんなに乱れたものであっても、その中の教学用語の平易化に関心持たなければならぬと考えるからである。

更に指摘するならば、現在の日本社会で使用されている和語・漢語・カタカナ語の混在の中で、特にカタカナ語の増加は、日本の国際的立場も踏まえて、メディアの発達と情報処理機器使用の簡便さから飛躍的に使用頻度が増しているという事実である。特に英語が世界の公用語という地位にあるためか、単語の発音そのままがカタカナ表

記で使用される事例が多くあり、いわゆる和製英語と混在して、カタカナ語の意味の習得に混乱がみられるのが現状である。そこで、「ことば」とはどういうものなのかを少しく検討をしておきたい。

二、「声」としてのことば」と「文字」としてのことば」

深谷昌弘・田中茂範両氏の共著「コトバの〈意味づけ論〉——日常言語の生の営み——」（紀伊国屋書店）を参考に、コトバと言葉を考えてみたい。『同書』のプロローグに、

「コトバは、それが音声であれ、手話であれ、文字であれ、あるいはその他の記号と呼びうる何かであれ、シンボル化能力——事象をシンボル（記号）として扱う能力・シンボルを操作する能力・シンボルを生成する能力——の現れであると同時に、それらの能力を引き出し、そして発揮する手段である。」
と述べ、更に、

「人は、事象を状況内で意味づけ、それについて語る。そして語られたコトバは、相手の状況内で意味づけられ、応答の契機となる。こうした意味づけ同士の相互作用が遣り取りを生み、遣り取りをとおして、種々の関係——協調関係、敵対関係、依存関係などの関係が作られる。こうした遣り取りのことを一般に「コミュニケーション」と呼ぶ⁽¹⁾」

と意味づけ論を定義し、「コトバ」はコトバの遣り取りから意味づけされて「言葉」となる、というのである。

この定義を借り、コトバを考えるに大別は「音声」と「文字」である。そのコトバの使用において、言語学が指摘する世界民族の使用は、圧倒的に「音声」である。「文字」（文字を持っている言語）は世界の使用言語が三千と

も五千とも言われているなかで、百に満たない数であると指摘されている。(以下「コトバ」というカタカナ表記はシンボル化能力の手段の意味で使用する)

キリスト教の聖典『新約聖書』の「ヨハネによる福音書」の冒頭に、

「初めに言(ことば)があった。言は神と共にあった。言は神であった。この言は、初めに神と共にあった。万物は言によって成った。成ったもので、言によらずに成ったものは何一つなかった。言の内に命があった」²⁾

とあるように、欧米人はコトバを神そのもの―創造主―と考え、それ故キリスト教文化圏のコトバに対する愛着(母語として)は、現在の日本人(我々を含めて)には到底理解出来ないといえる。コトバは文化であり生活であり、さらには思想や宗教を表現するそのコトバを使用する民族のレーゾン・デートルであるからである。ここで、喚起しておきたいことは、私どもが親しんでいる「漢字」は「表意文字」であり、「文字」そのものに意味を持たせている言語であるのに対して、他の世界の大多数の文字は「表音文字」なのである。それ故、文字がもつ思考性を考えるならば、現代の日本語の混乱(和語・漢語・カタカナ語の混在)は、表音と表意の区別・区分のないことを含めて仕方のないことではないか、と思えるのである。

(1) 「音声のコトバ」の特徴

音声(以下「声」とのみ表記)の思考様式や表現様式と文字のそれらの様式との差異について少しく考えてみたい。

人間が文字(その発明と使用)を使う以前より、声による意志疎通(コトバの遣り取り)が為されていたことは多くの言語学者の指摘するところである。文字が無い、声による思考様式はどのように伝達されたであろうか、と

推測するに、記憶（憶持）がそれを可能にしているといえよう。あるコトバ（意味づけされたもの）を聞いた時、それを知っているということは、そのことを思い出せる、ということである。思い出すということは記憶しているそれを再現する、ということであり、それは再現しやすいものということである。そのため記憶する事柄はすぐに口に出せる記憶しやすい表現でなければならぬ、ということになる。文字を知った人々は文字として記録された事柄を読み書きして知る（思い出す）ことになるが、文字のない人たちはどうしたのが問題となる。いくつかの推測がなされているが、基本は「記憶できるような思考を思考することである」といえる。そこに記憶しやすい型にもとづいた表現、反復や対句、音韻やリズムをもった表現ということになる。記憶のしやすさを助ける慣用語、定型表現が特徴となるのである（原始仏典の伝承もこの型であるといえよう）。

ここで声のコトバ（無文字）の考えられる特徴をいくつか列記してみる。『声の文化と文字の文化』⁽³⁾（W・J・オング 藤原書店）を参照し、筆者の私見を加えて整理したものである。

* 声のコトバによる表現の特徴は、累加的・累積的・多弁的であるといえよう。文字に表せば一つですむ事柄を、声では何回でも繰り返し返し、それも修飾をつけての表現となるからである。文字では重複表現も声ではそれが冗長ではないのである。

* 声のコトバの思考的特徴は保守的であり、伝統的であるといえよう。声のコトバは繰り返し語られ習得・記憶される。そのために新しい知識や表現の創造がなされるには大変な労力が必要とされる。記憶の保存ということはその自体保守であり、それを保持することが伝統であり、その具現者である博識の古老が尊敬評価される。過去からの知識、専門的な事柄であれ物語的なことであれ、さらには宗教的な教えであっても、古きことを物語ることが声のコトバのコミュニケーションであるからである。文字を持つことは知識の保存が記憶のみではなく、知識

の保持継承者の存在としての古老（人生の多年経験者）の価値は重くなく、新しいことの発見者、未知の事柄への関心が深い若者の値打ちが認められることとなる。勿論声のコトバはすべて保守的であり、新しい事柄をすべて認めない、ということではない。概説的特徴として保守的・伝統的で、それは知識や事柄の記憶保持ということの特質と考えられるのである。特に宗教的な意味も多いのであるが、ある民族の出發（發生）から現在までの、その民族の神々や英雄たちの働きや行動が、神話や英雄叙事詩として口伝継承されている実例は、数多く示すことができる。

* 声のコトバ社会のコミュニケーションは、日常生活を離れてはなりたたない。人と人とが会話して知識や事柄の伝達、交換がなされるからである。その知識も身近な人間相互の關係に関する意味づけがコトバでなければならぬ。文字では人間關係を離れた抽象的思考や表現が可能であるが、声は無保存のためそれは不可能だからである。声のコトバ社会には人間の活動を離れた統計とか、数値的リストのようなものは説明できないものである。

* さらに特徴を挙げるなら、声のコトバ社会にとって学ぶこと、知ることとは、相手（その事柄・知識を知っている保持者）との密接且つ参加的關係であり、共有的、一体的な關係が構築され、感情移入されるまで深まることになる。（往々新聞記事となる新興宗教教団の教祖と信徒の關係が教祖のマイインド・コントロールと指摘されるが、この事象と言えよう）文字では知識や事柄は知られる対象から知る主体を切り離す客観的立場、客観性を持つことができるが、声のそれは人間關係の共有性を離れた客観性はあり得ないのである。

このように、声のコトバ社会（あくまで文字を持たない社会を想定）の特徴は、我々が学んだ仏教の基礎、初期インド仏教（經典結集以前）の特徴でもあろうと思える。

声に出して話されるコトバは、その人の内部から発せられ、人間同士を互いに意識を持った存在、人格として認

めることになる。コトバは話し手と聴衆、または話し手同士の間一体感を生ずることになる。もし、話し手が聴衆に資料（文字）を手渡したとき、話し手の話と聴衆の資料黙読は、そこに資料のない時とは違った雰囲気、一体感とはいえない状況ができる。話し手が聴衆に呼び掛けるコトバ、相手の名前や聴衆全体への皆さんという言い方は、文字で文章として示すとき、著者と読者（複数）の一体感はないのである。

(2) 「文字のコトバ」の特徴

当然、文字のコトバの特徴は声の文字の特徴の対極にあるといえる。前記参照の『声の文化と文字の文化』の中で、著者（W・J・オング）はプラトンの『パイドロス』の中に「書く（文字で表す）」ことをソクラテスに批判させている。そして、その批判は現代の機械言語（コンピューター言語）への批判と同様の議論だと指摘するのである。著者は「書くこと」（つまり文字のコトバの使用）の批判をソクラテスの言を引いて示している。そして、その批判は、

*書くことは非人間的である。書かれたものは一つの事物であり、製品である。（話すことはその人の精神の中しかありえないものであり、それを書くこと（書かれたもの）は精神の外にある非人間なものである。

*書くことは記憶を破壊することであり、書かれたものに依存するため忘れやすく、精神を弱めるものである。
*書かれたものは、基本的には何も応答しない。

*自身で話したコトバは、そこで直ちに応答、弁護できるが、書かれたコトバはそれができない。現実には話されるコトバと思考は、つねに現実の人間同士の遣り取りの中に存在するが、書かれたものはそうではなく、非現実的、非日常的、非自然的な世界に留まるだけである。

と列記しているのである。

この批判にすべて同意できるものではないが、人間が自分自身を離れてのコトバと思考に責任（応答や弁護）を持ってないとする立場は、文字をもつての議論とは別の観点が必要であるといえよう。そして、筆者の思うことであるが、声のコトバによるコミュニケーションは人間の五感のうち聴覚を中心として他の感覚も併せての理解となる。それは相手（話し手）の言う意味を五感を総動員してとらえようとするからである。

それに対して文字のコトバは視覚のみといってよいと言えよう（但し、視覚障害の方のための点字があるが、いまの議論では外においておくことにする）。声のコトバによるコミュニケーションはその場における瞬間的なものであり、時間をおくことによる記憶保存は困難といえる。文字は記録保存が特徴であるが故に、その困難さはないのである。

三、今回の小結

このように声のコトバと文字のコトバとの特徴的違いを概説したうえで、両方のコトバを使用している現在の我々の問題は何か、ということになる。我々は中国の漢字文化圏にあり、表意文字としての漢字文化の影響下にあって、その伝統的思考・思索に我々の教学を学習継承してきたのである。そして筆者の関心は、現在の和語・漢語・カタカナ語の混在する現状の日常会話において、教団（宗門）の「教え」を布教するときの「教えの平易化」とは何なのか、どうしたらよいか、を常に問い続けなければならないと考えるからである。教団の「教え」を、単なる情報（知識としての教義や教団の歴史的事柄）の公開披瀝であるとするならば、それは単なる事項の羅列、

百科事典的事象にすぎないことになってしまふからである。当宗の宗教的価値、当宗の信仰の価値が最高最勝のものであることを、どのように平易な表現をもって示し得るかが私の現在最大の関心事であるからである。

そこで、筆者自身が心懸けていきたい、いくつかの提案を記してみることとする。

① 対人のコミュニケーションを最優先すべきと思う。声のことばの特徴に挙げたように、累加的・累積的そして多弁的に説法する話し手となるべきである。(法門の語り部であることを目指したい)。

② 「教え」の伝達は声のことばをもつてその人自身の「生きて在る」立場、経験を通しての直接の語りかけが最高の方法論であるといえる、ことを常に心していきたい。

③ 文字のことばの特徴に充分過ぎるほど関わっている現状から、一人の信仰者としての自身の在り方を常に問い続けたい。(当然、文字のことばの思索は今まで以上に行うことは当然である)。

④ 文字のことばの思考形態を踏まえて、声のことばを持つコミュニケーションの特徴を当宗の僧侶(法華経信仰者としての自分自身)として、大衆(信者未信者を問わず)にどのように応対するか、を常に自身の問題として持ち続けることである。

この研究ノートは筆者の関心をまとめているもので、論文としての体裁は充分でないことを承知しながら、活字化を試みたものである。漠然とした内容の無いものようではあるが、筆者が問題としているもの、筆者の問題意識は汲み取っていただけではないか、と期待するものである。表意文字の漢字的思索に慣らされた私どもが、現在の和語・漢語・カタカナ語が混在する、日常日本語を使用している現実生活の中で、自分たちの専門用語(その用語に示される私どもの信仰と思想体系)をどのように考えていったらよいか、という問題意識であり、問題

提起でもある。

註

(1) 「コトバの〈意味づけ論〉——日常言語の生の営み——」(深谷昌弘・田中茂範共著 紀伊國屋書店) プロローグ参

照

(2) 「聖書」(日本聖書教会 新共同訳)「ヨハネによる福音書」(新、一六三頁)

(3) 「声の文化と文字の文化」(ウォルター・J・オング 藤原書店)

〈キーワード 総合の表現 総名 広略要 総要 声と文字のことば〉